

二本松税務署長賞

税金の学習を通して

二本松市立二本松第一中学校

三年 高橋 源 幸

『肉』とかけて『金』と解く。そのころは、どちらも『ぜい』が付くと嫌われる。

これは、何気なく見ていたテレビのバラエティ番組の一場面である。番組の出演者もスタジオの観客も、笑いながら、みんな納得していた様子だった。

しかし、僕は、何か違うんじゃないかなと感じた。確かに『ぜい肉』はいらぬし、嫌われる。でも、『税金』は違うのではないかと疑問に思ったのだ。嫌いだと一概に言ってしまうていいのだろうか。

もし、税金がなくなってしまうたら、どうなるだろう。毎日の生活の中で出るゴミの収集や処理はどうしたらいいのだろうか。僕たちの安全な生活を守ってくれる警察の代わりはだれが行ってくれるのか。消防も、道路の整備も、学校も、これらの施設やサービスは

全て税金によってまかなわれているのだ。

たとえば、僕は今、中学三年生だが、中学生一人あたりに年間約九十五万七千円の教育費がかかるといふ。小学校、中学校の義務

教育九年間にかかる費用を計算すると、なんと七百八十九万九千円にもなるというのだ。驚いた。正直に言つて、そんなにも多額のお金自分たち一人ひとりにかかっていると想像もしていなかった。僕たちの学校生活は、税金によって支えられていることを初めて知った。

税金を支払うのが嫌だ、できれば払いたくないという人も、実際に自分たちがどれだけ税金の恩恵を受けているかを知ったならば、そんなことは言えないはずだと思ふ。より高い福祉を得たいなら、大きな負担を背負うのは当たり前のことだ。自分の負担をなるべく小さくすませて、恩恵にだけあずかりたいというのは虫がよすぎると思ふ。公共の福祉やサービスと負担とのバランスが大事なのだと思ふ。

僕はまだ中学生なので、実際に関わっているのは消費税ぐらいである。消費税は、国民みんなが平等に負担する税金だ。税金について学ぶ前は、消費税を嫌だなあと思つたり、めんどろに思つたりしたことがあつた。しかし、僕が支払う五パーセントの消費税のうち四パーセントは国に、残りの一パーセントが地方税として県に納められている。僕だつて少しは税金を払っているのだ。それを知つて僕はうれしくなつた。たとえ小さな金額でも、世の中の役に立っていると思つたからだ。

将来、僕も自立した時には、所得税をはじめとして、県民税や市町村民税など様々な税金を払うようになるだろう。自動車税や固定資産税などもあるかもしれない。その時には、税金は嫌だなどとは言わずに、誇りを持って支払いたいと思ふ。正しく税金を納めることは、社会の一員としての証だと思ふからだ。そして、それらの税の使いみちについて関心を持ち、みんなに平等な負担と給付の關係について考えていきたいと思ふ。